

或る 温羅・考察

岡山歴史研究会顧問 大河原 喬

まえがき

温羅について考えてみようと思ったが、温羅についての資料が残念ながら少ない。当然のことながら温羅の時代には文字の無い時代であり記録の無いことは当たり前のことだった。

そしてこのことを学んで行くことが、考古の学問なのである。ここに歴史学と考古学の区別が存在するのである。

温羅は鬼ではない。大和の政権が青銅器の時代、温羅は鋳物鉄の技を持っていたのである。

ヨーロッパでは鬼＝魔女などであったが、鬼ではなく、中央政権に従わない勢力の事を総称して鬼と呼んできたのだと私は思っている。

温羅が鋳物や鉄の技を持っていた事が、どの様に吉備と称して長船に至るかを考えてみたいと思この考察に接したのであり、更に山鳥毛の足取りの少しでも見られればと思立ったのであります。

温羅の歴史的背景

温羅考察について温羅だけの事に就いて考える事は難しい。温羅の歴史的背景から考えてみたいと思う。

今から約3万5千年前は、細石器時代で細石器刃が日本列島に広まっていたと考える。一千年程経って縄文時代に成ったと考える。そして更に一万年程経過して貝塚や環状集落、三内丸山が見られる。

縄文前千五百年前頃、稲作が開始され岡山県南溝手遺蹟が発見されており、稲作が始まったのである。千年程続いた縄文時代、水稻農耕が開始され本格化した事を物語る遺蹟も発見されている。

更に百五十年程経て東海地方北部水田造成も始まり、青森県砂沢遺蹟、そして五十年後西日本拠点集落高床式の大型建物(奈良地方)が道営され、奈良県唐古鍵遺蹟が発見されている。

私が東京の本郷学園の高校で教鞭をとっていた時には、縄文期には米作りはなく、米作りは弥生時代だと教えていたことが普通であり、これが一般的な教育の原点だった。

紀元前千五百年、稲作から考えると、かつての歴史教育は、今少し変わって来ているようである。

紀元前四百年頃には稲作の本格化と成ったのである。縄文時代には稲作はなく弥生時代に成って稲作が始まったと教えてきたのである。

この時代、稲作が起り本格的に成った頃、温羅のそんざいはあったと考えられ、八百年程過ぎてみられる鉄製農具、曲り刃鎌、U字型鋏、鋤先が現われ現代の初期時代、温羅は鋳物鉄の利用が半島より伝えられていた事が考察出来る。

可成り成熟した稲作が見えるのである。鉄技術の伝来は本格米作りの技術と共に九州地方、吉備地方に伝わり生産性のたかさや農業収穫を得ていたのではないかと考察する。

温羅の最盛期は稲作鉄文化と一致

稲作の紀元が千五百年前、稲作が本格化する紀元前四百年頃までが温羅の最も盛んな時であったと考察する。

従って、稲作の始まりも半島から伝えられ、そして豊かさに伴って鉄鋳物の鋳造技術も輸入して、稲作を伴って大きな成長が出来た時代であったと考察することが出来る。

国家的集団が結成され、九州、大和地方に邪馬台国の出現を見、最近では邪馬台国の存在も吉備の地方に見えると云う研究者もあることを識る。

兎に角、弥生時代の始まる紀元前二百年前頃には、邪馬台国が出来、卑弥呼の国家的集団の形成が見られ、倭人百余国に分国してその一部は楽浪郡に朝貢したことも漢書に記録がある。147年～188年、卑弥呼が女王として、魏志倭人伝の記録に見る事が出来る。

247年、卑弥呼が滅し奴隷百余名、殉葬して卑

弥呼の宗女耆与(いよ)13才を立て王となし国中が治まった。

魏帝に男女1130人、白珠五千を献上の記録が魏志倭人伝の中に見る事が出来る。

- ・ 紀元前221年、秦始皇帝が中国を統一。
- ・ 202年、劉邦(高祖)、項羽を追い、漢を建国す
- ・ 前27年、ローマ帝政開始される

こうした世界の情勢の中で、温羅の活動は稲作の隆盛と鋳物鉄の鋳造を入れて、可成りの発展を遂げていたのではないかと考察する。青銅器しか持たなかった大和政権の朝廷側は、農作技術を基盤に鋳物鋳造技術を持つ温羅の力量を見逃がす訳はなく、更に温羅攻略を考える。

それが四道將軍の勢いとなり、桃太郎伝説と成り、温羅攻略の話しと成るのである。吉備津彦の陣は吉備津神社にあり温羅の陣は鬼ノ城辺りと考え、この二点を結んだ一直線上に、矢喰神社がある。矢喰いとは吉備津彦の射た矢と温羅の投げた岩がぶつかり岩に矢が付きささまま落下した地点その場所が矢喰神社である。

また、吉備津彦が二本の矢をつがえて射ち、その矢の一本が温羅の眼に当たり、流れた血液が川に流れて血液が流れたら紅い血の色ではなく黒くなるのが普通であり、この血吸川の血の色は阿曾村の鉄の鋳鉄中高熱を冷やす水の流れであり、鉄の鋳造の折りの鉄の鑄が水に溶解して、紅く血の様に変わって出来、血吸川となったと考えるのが普通であり、血と鑄を結んで考える事が私の一番の考察である。

温羅攻略の最後は此の血吸川を鯉となって下流に逃げ吉備津彦が鵜になって鯉を追いかけ矢部まで下って鯉を鵜が食して戦いは決した事になり、ここに鯉喰神社があり、これに依って桃太郎伝説は終わるのである。

ここで一点注目すべき事がある。吉備津彦は温羅の本陣を攻めず矢部の血吸川の下流域に、温羅を追い打ち鬼ノ城本陣を壊滅しなかった。ここに大きな意があると私は第一の考察点であると思ってい

る。

吉備津彦は敵の大将の首は執ったが阿曾の産業や農業生産は攻めず、其のまま潰さないで残して来た。

温羅の豊かな富と技術が古墳文化へ

温羅の力が農耕文化として栄えて行く事は想像できる。農耕のスタートは同じでも、温羅は半島より農耕の技術を輸入しており多くの半島の人間を入れている。更に鉄の鋳鉄技術を持っており勿論半島より輸入された技術によって生産性の増大を計り、集団的行動を開始したことを考察することが出来る。

その余剰収穫や余剰生産性は一体何に使われたか、ここが問題であり、最も意を引く事柄である。

これを古墳の造成に結んでみたいのである。造山古墳が其れである。造り上げる人間の数は解らないが規模に於いても其の構造に於いても、可成り大規模な古墳と成るのだが、最も注意しなければならない事は、温羅と造山古墳を結び付ける資実が少ない、想像に意味ありだが、時代とは別に考える。稲作の増大性と生産余剰を考える時、これしかないと言う結論を出すのである。

451~475 年頃、群集墳と云うような規模の大きな古墳の造成と農耕術の生み出される道具や機具は曲刃鎌 U 字型鋤鋤先等の出現は、いそがなくても農耕生産の増大を招き富の蓄積の深まりもみられるのではないかと考察する事が出来る。

少し遡る事391年、高句麗好太王が即位し、其の碑文に日本の記述が見える。倭の五王は讚=履中、珍=反正、濟=允恭、興=安康、武=雄略とある。

仁徳、応神、履中等の古墳は大規模古墳として堺にあり、その規模が造山古墳と同じくらいの規模の古墳である事に意を注ぐ。そこで注意すべく一点は、仁徳・応神・履中の古墳の方が少し大きく、造山古墳の規模はこれら堺の古墳とは規模が小さい。

これは当たり前の事であり、天皇陵は地方の造山古墳より大きい古墳を造る位の政治特権くらいはあ

ったのではなからうかと私は想像する。

まだ注意すべき点は 2・3 ある。岡大の考古学者、新納教授は造山古墳の後円部の北方を発掘して、“周濠”のある事を発見して研究成果を発表した。私も新納教授の意を尊重して“周濠”を持つ仁徳・応神・履中陵と同等の古墳である事を認めねばならない。

造山古墳の周濠については、私の子供の頃此の古墳は山を削って造られた古墳だと耳にし、本気でそう思った事があったが、新納教授の意を受けて、“周濠”を持つ古墳だと思いを致す。

勿論、造山古墳は“陪塚”(ばいちょう)を持った古墳であり、その一つは造山千足装飾古墳の存在も大きく意味を持つものである。

更に堺には仁徳・応神・履中と云う古墳に天皇の名称を持っておる事、一方造山古墳は地方の名である造山と云う名称である事に注意を向けたい。

造山古墳は吉備地方の

第一点は埋葬者の名称がない事は、文字の日本輸入の前でないかと云う事。第二点は堺の古墳より早く造山古墳が出来ていたのではないかと云う考察である。この方が中央大和の政権側からすれば、吉備地方にできた前方後円墳より少しでも大きく造り度いと思うし、地方の古墳とは一味異なる古墳である事を主張したかったと考察する事が出来る。

温羅が文字を持つ以前の時代であり、勢力を持っておりながら大和の政権とは異なる、地方の政権であったと考える事は当然の事であったと考える。

538～552 年の仏教伝来を積極的に受け入れて、いち早く全国的に仏教を布教し仏教を基調とした政治展開を実施した政策の意味は大きい。

鬼ノ城から造山古墳の間に備中国分寺・国分尼寺を創設した事である。鬼ノ城の温羅の力と結びついたのであろう。造山古墳の間を分断する型で中央の大和政権の力を示したと考える事は如何でしょうか。そして更に桃太郎伝説とも関連するものであ

る。

552 年、日本書紀欽明天皇 13 年、日本への仏教伝来と云う事であり、585 年蘇我馬子は大野丘の北に塔を建て仏舍利を納める。592 年推古天皇即位、593 年厩戸王(聖徳太子)を皇太子に立て政治に参加させ、603 年冠位十二階を定め、604 年には憲法十七条を定め、607 年小野妹子を遣隋使として隋に送る。622 年聖徳太子は斑鳩宮で没す。646 年大化の改新の詔(みことのり)を発する。墳墓葬送の制を改め、薄葬令を制定したのである。

仏教伝来に依る死後観念の相違に依り大規模な古墳を造る事は出来なくなり、古墳は小規模化していくのである。仏教の死後観念の相違に依って、古墳の規模は小さく前方後円墳のような古墳は出来なくなったのであり、小規模古墳は内部構造の複雑さを呈するようになったのである。

桃太郎伝説や温羅攻略は矢部の鯉喰神社で終結したのであるが、吉備津彦は鯉を喰うだけで、鬼ノ城本陣を攻めず温羅の首を吉備津に持ち帰り温羅の首を地中深く埋め、この上に御釜殿を建て世相の占いを行った。

温羅の本陣阿曾の姫を御釜殿の神女にして世相を占ないは現代も続いている。阿曾の鑄造品や鉄農具の生産など稲首を切る包丁やその他の生業(なりわい)はそのまま東方に流れてゆく結果になった。それが長船に到着して、長船造剣の基になるのではないかと考察する。

長船造剣地への道のり

吉備津彦は大将である温羅を矢部の鯉喰神社に攻め落したのだが本陣である鬼ノ城はそのまま残したのではないかと考察する。更に阿曾の鑄鉄製鉄技術を持った集団は生き残ったのではないかと考察する。生き残った技術集団なのか、二・三人の者なのかは分からないが、ここではこれも技術と称して話す事にする。

475 年の記録では鉄製農具として曲り刃鎌 U 字形

鍬鋤先等の農具を作る技術集団として考え、そして行く先々で作る物を変えて、武器・刃物・刀の製作を行ったと考えられる。

その最初の集団は阿曾より東方に向けて動き始めたが、真東に向いては吉備津宮があり、温羅の首が九尺程の地下に埋められ、その上に御釜殿が築かれている事は識つていようし、もっと2・3里北方の山中を抜けて東向きしたと考えられる。

阿曾から足守を経て稻荷山の北側を回って、今の桃太郎空港辺りを通り抜け、御津に出たのではないだろうか。御津・金川を経て五城辺りには金物の生産地「宅美造剣」と言ういわれのある所が、刃剣生産も始まっていたと考察できる。

大蛇胎治の伝説地

この辺りには大蛇退治の伝説が残る。八つの首を持つ大蛇(おろち)は八つの勢力を持つ郷士(地元)勢力と思われ、これ等の八つの集団を攻撃して、血の付いた刀を洗った所が「血洗いの滝」と言う地名を残している所である。

血洗いの血も、血吸川の血と同じように血ではなく、金属や農具や武器を製造した時に出る鉄の錆(サビ)ではないかと考察する。

この地域(赤磐吉井御津五城石上)には布都魂神社と云う格式の古い神社がある。この神社は備前国の一宮とあり、吉備津彦神社も同じ一宮であり、備前国には数少ない「一国に一宮が二社」ある。

この神社には刀の柄のはしに円形の輪を持った刀が神刀として奉納されていたと云う事であり、また石上と云う地名から石上神社に「七支刀」を造るといふ266年の記録も気になる一点である。この神社に奉納された刀は紛失して、後に月山貞一に依って鍛刃して、奉納を受けているようである。

こうして眺めると「血洗いの血」と「血吸川の血」と、二つの大きな鉄錆、記録的な地名は重要視出来る。鉄農具の製作から刀剣製造の足跡として考えれば、吾が岡山の刀剣史に興味を湧く筈である。

石上布都魂神社の元宮か

この神社の官司は物部明德新官司であり、先代の官司物部忠三郎氏は岡山の官司の中でも岡山で最も位の高い官司であります。

この神社のある地名も「石上」と云う地名であり「石上」は石の上の地名を物語るものとするれば、鉄青銅器などの産する地と解する事も出来る。

布都魂神社の奉納刀剣に就いてはもっと詳しく考えてみる必要ありと考える。(天理市の石上布都魂神社の元宮と考えられる点など)

周匝(すさい)は要の地名

赤磐郡誌の中に「周匝」と云う地名がある。岡山には読みにくい地名が数多くあり、これもその一つであるが「周匝」は素戔鳴尊(すさのおのみこと)と云う大蛇退治の功労者であり大蛇の尾から出て来たと云う剣を「草薙の剣」と称する。

石上神宮剣師靈模造剣(ふつみたままもぞうけん)というものが布都魂神社に収められたと云う事からみても、平安期の初め頃までは、優に備前に於ける唯一の尊き神社である事が窺える。

剣は環頭太刀にして、刀長二尺二分平造棟、中心(なかご)五寸環部刃文乱れ刃は綾杉鍛目方二百四十六匁八である。

一方この時代の奉納刀と云えば七支刀がある。熱田神宮に奉納された刀である。此の刀が何処で鍛刀されたか判らないが、この当たりの時代の作品ではないかと想像するのである。

血洗いの滝と云うのは吉井町山方の地にある滝であり、その水流に赤く染まった岩が多くある。これを「血洗いの滝」と称し、血の流れを想像して血洗いとしたのであろうが、私はこれも血ではなく血吸川と同じく、鉄の錆であり鉄器製造の証ではないかと考察する。

この山方より近い所に「周匝」があり、この周匝は河川の「みなと町」として栄え、吉井川のみなどである。周匝は勿論、津山奥津方面より農産物や手芸品や細工物集産地として周匝が生まれ、またここは

金剛川と云う大原方面江見林野方面の農産物や手芸品等の物が周匝で合流して吉井川を下り長船の刀剣生産地に頼ったのであり、この吉井川は棟田博の著書にある『美作国吉井川』と云う本で、川の生き方、使い方等の書かれた面白い本であったことを思いだす。

ここで最も重要な事はこの吉井川が中国山脈を越えて山陰のやすぎの砂鉄「玉鋼たまはがね」等も陸路にて中国山脈を越えて津山辺りまで往来して津山からよしいかわの船団に依って長船まで運ばれたのでないかと考察するのである。

その理由は長船の周辺の山々は砂鉄の採れる山がない。そんな筈はない、在ったけれど大量の刀剣生産を行って地元の砂鉄「玉ハガネ等の鉄原料は掘り尽くされたのではないかと想像する。

そうでなければ日宋貿易で日本船の朝貢交易で持ち出された手工芸品、日本刀(一般に2千振り)の数が中国に渡った記録がある。これにより京都市内に寺院を建てられる程の利益が持たされたとう。

赤穂浪士の天野屋利平は四十七士の武器を大原の先の栗倉の山中で砂鉄をとり武器を造ったと云う記録がある。これは秘密に行われた為にこのような山奥で造られ遠い地に運んだのだとも想像できる。

こうしてみれば長船はこのような大量の刀剣造りに活発であり、日本最大量の生産地に成長したのである。

この様に大量の刀剣が造られたのは、貴族の政治ではなく武士の発生と武士団が形成され荘園経営支配力ある貴族から武士の発生に依るもので、武士団の成長は領国経営に変わり刀剣の必要はこの武士の発生より増大した事も考えなければ成らない。

我が国の刀剣は砂鉄の芸術であり、錆びた製品が茶釜であり、輝き光る製品が刀剣であると思っている。私も瀬戸内の市長が「山鳥毛」募金を完了した時と同じ位、実は私の小さなちいさな目的を達成

した事が在る。

それは「友成」を初代として「祐定」は60代続いている。その60代目の「定」の刀、元之進潜龍子定の在銘の刀を入手する事が出来た。これは私の喜びである。

日本刀には大きな五つの流れがあると云われている。相模国の相州伝、美濃伝、奈良の大和伝、京都の山城伝、備州長船伝の五つで、五ヶ伝と云う名で呼んでいる。

”山鳥毛”のこと

この刀は備前の刀、太刀である。この刀は「合口揃え椿(こしらえ)」と云って鰐(つば)がなく、刀は太刀姿なのであります。鰐元(つばもと)に丸型の小さな打ち込み傷があり国宝である。

この太刀は新潟県長岡の商売人が持っておったものを、岡山の繊維会社の社長である商売人が入手し、それが今年瀬戸内市(長船)の市長の大変な功績の結果、瀬戸内市のものになり大変な功績となったのである。山鳥毛は勿論瀬戸内市の宝物であります。本来岡山県の宝物であり、岡山市のたからものでもあり、県民一人一人の宝物であります。武下市長、今回は本当に有難たく御苦労さまでした。9月の展示会を期待しています。

著者略歴 大河原 喬 雅号 紫朗

昭和17年角谷家の三男として大阪に生まれる

小中高時代 岡山市津寺129番地に住居 昭和37年中央大学文学部史学科に入り卒業後 東京私立本郷学園高等学校教諭となり大学入試学科で国史を教える 昭和45年大河原農機(株)に入社勤務、現在に至る

昭和56年以降の所属団体

・岡山明心館道場入門・竹内流総合武術社に入社・日本古武道協会会員・大日本武徳会会員・岡山県古武道連盟副理事長・初実剣理方一流古武道練士6段

後楽園魅力向上委員会委員・岡山カルチャーズまちづくりの会会長・岡山の和文化を楽しむ会理事長その他五団体の代表や理事を拝命

参考文献=吉備郡誌・赤磐郡誌・吉備地方史の研究・吉備津彦

と温羅・美作国吉井川 年表1~3部